本音の漏れた惚気け話

本音の漏れた惚気け話

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21345292

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後

ネイル村で新婚生活を始めたヒュンケルとマァムの年末年始のお話。
2024年初頭は、不安なニュースが多いので、書くつもりはなかったんですが、糖度高め、激甘なヒュンマにしてみました。
「賢者のお告げ」novel/16772511
の１ページ目と２ページ目の間の話。

カヅキ様user/1688436が、素敵なイラストを描いて下さいました!!!!スゴイ!!漫画だ!!マァムがめちゃめちゃ可愛いですし、きょとんとしたヒュンケルもまた可愛いです✨カヅキ様、ありがとうございました！

年末年始に会いがちな、酔っぱらい昭和おじさんのイメージなモブたちが登場。マァムがあまり怒ってないのは、彼女自身の寛容性であり、作者がそれを容認しているわけではありません。

2024.1.25　カヅキ様のイラスト掲載

Table of Contents

本音の漏れた惚気け話

　聖誕祭から、年明けをはさんで、公現祭までの約2週間は、ホリディ・シーズンである。
　この時期は、ネイル村からロモス王都に出稼ぎに出ていた者たちも、ロモス北部や、遠くギルドメイン大陸まで嫁いでいった娘たちも、この小さな村に帰省してきていた。
　普段よりも人が増え、にぎやかさを増したこの時期のネイル村では、あちこちで宴席が設けられ、旧交を温めあっていた。
　この年は、特に賑やかしい様子であったが、それにはわけがあった。
　この村の英雄の娘であり、村の誇りでもある「アバンの使徒」マァムが、結婚して、夫とともに、この村に戻ってきたからだ。
　久方ぶりに村に帰ってきた者たちは、レイラの家に顔を出すと、マァムと彼女の夫の顔を見て、それを肴に酒を酌み交わし、反対に、マァム夫婦が村の家々に挨拶に行くと、これまた宴席に引きずり込まれるという塩梅であった。
　もともと人づきあいが得意ではないヒュンケルではあったものの、彼は、相手に悪い印象を与えるたちでもない。
　自分よりも年配の村の男衆に、まあまあ寄っていけ、飲んで行けと言われれば、断るでもなく、一献頂戴し、今後ともよろしくお願いしますと丁寧なあいさつをして立ち去るのが、通例になっていた。
　この晩も、同じように、マァムとヒュンケルがレイラの家に行くと、そこにどやどやと、帰省してきたばかりの出稼ぎ帰りの男衆やその妻たちが押しかけて来た。
「レイラ！久しぶりだな！」
「ただいま。今年も帰ってきたよ。」
「ごめんなさいね、レイラ、うちの人、もう出来上がっちゃってて。」
「あっちこっちで飲んでくるもんだから。」
　男たちの帰省の挨拶と、その妻たちの詫びる声に、レイラは、い

つも通りの穏やかな笑みを浮かべて対応をした。
「お帰りなさい、みんな。元気そうで何よりだわ。」
　その場に居合わせたマァムもヒュンケルも、村の者たちに挨拶をすると、特に男たちが色めき立った。
「おおっ、マァム！結婚したんだってな！おめでとう！！」
「あんたがマァムの旦那さんか！すんげえいい男だな！」
「マァム、またずいぶんいい男を捕まえたなあ！」
　既に酒が入っている男たちは遠慮がない。ずけずけと言いたいことを言う配偶者にあきれ顔の妻たちが、マァムたちに目配せした。
「レイラ、押しかけちゃってごめんなさい。」
「マァム、ヒュンケル、相手にしなくていいからね。」
　だが、そんな女たちの言葉が聞こえているのかいないのか、男たちはヒュンケルに酒を薦めた。
「ほら、マァムの旦那、一杯やろうぜ。飲めるんだろ？」
　ヒュンケルは、苦笑気味ではあったが、リビングに着座し、彼らの求めに応じた。マァムも席につくと、たちまち、宴席の出来上がりだった。勝手知ったる村人同士、酒もつまみも持参であり、最早、場所さえあれば、それで十分だった。
　酒に酔った男たちは、マァムやヒュンケルに、出会いのいきさつやら、いつから付き合っていたんだとか、相手のどこがいいのかなど、お構いなしに質問をぶつけてくる。
　酔っ払いの扱いに慣れているマァムは、適当に言葉を返した。言えないこともある上に、恥ずかしくて言いにくいこともたくさんある。どうせ、彼らは、明日にはほとんど覚えていないのだ。
　そうしているうちに、男たちが幼い頃のマァムの話題で盛り上がり始めた。客人の中には、マァムと同世代の若者もいて、思い出は人一倍多いようだった。
「それにしても、マァムがこんなに早く結婚するとはなあ。」
「村にいた頃は、誰とも付き合ってなかっただろう？」
「そりゃ、マァムは村で一番強かったもんなあ。」
「うちの村の男じゃあ、おっかなくてマァムに手なんて出せなかったよ。」
「男勝りだったもんなあ。」

「そうそう、ロカそっくり。」
「俺は子どもの頃、マァムに怒られてぶっ飛ばされたことあるよ。」
「おっかねえなあ。」
「そのあとは、マァムに怒鳴られるだけですくみ上っちゃってさあ。」
　そろそろ悪口と紙一重になりそうだなと思ったマァムは、苦笑して言い返した。わざと眉を吊り上げ、怒った顔を作った。
「怒られるようなことするのが悪いんでしょ！あのときだって、年下の子のスカートめくって！」
「そうだ、そうだ、お前が悪い！マァムのせいじゃない！」
「わ、悪かったよ・・・。」
「マァムにはかなわないよなあ。」
　そう言って、周りの者たちが笑いあっていた。
　すると、今度はヒュンケルに水が向けられた。
「マァムの旦那さん、マァムに敷かれてるんじゃないのか？」
「大事にしてやれよ～、マァム。」
「そうそう、せっかく結婚したんだしなあ。もうちょっとおとなしく。」
「もうっ、またそういうこと言う！」
　マァムがもう一回怒ってやろうかと思ったそのとき、ヒュンケルの低い声が響いた。
「俺にとっては、マァムほど愛らしい女性はいません。」
　さらりと述べられたが、あまりにもストレートすぎる褒め言葉だ。
　しん、と場が静まり返った。
　マァムは、一瞬、虚を突かれ、だが、その言葉の意味を反芻すると、途端に頬を赤らめた。うろたえた声を上げ、夫の名を呼ぼうとする。
　だが、それよりも早く、上品な笑い声が響いた。
「ありがとう、ヒュンケル。マァムのことをそう思ってくれて。」
「レイラさん。俺は思ったことしか言っていませんよ。」
　相変わらず、真顔でヒュンケルは答える。酒を飲んでいるはずだ

が、頬を赤らめてもいないヒュンケルに酔っている様子はない。
　ヒュンケルの様子に、その場の空気が和み、笑い声が響いた。
「お熱いねえ。」
「いいね、いいね、新婚だな！」
「もう、たまには貴方もこのくらいのことを妻に言ってみなさいよ！」
「ちゃんと感謝してるよお〜。」
　そうして酒がさらに進む中、宴席の夜は更けていった。

　自宅に戻ったマァムは、リビングでテーブルにつくと、ふうと息を吐いた。その彼女の目の前に、水の入ったカップが差し出された。マァムは両手で受け取ると、夫に礼を述べた。
「ありがとう、ヒュンケル。」
　ヒュンケルは、自分も水の入ったコップを持っており、椅子に座ると、カップを口に運んだ。
「気分はどうだ？」
　この日、マァムは酒を口にしないようにしていたのだが、そのことは曖昧にしたまま、マァムはヒュンケルに応えた。
「大丈夫。ちょっと疲れちゃったかな。
　ヒュンケルは飲んでも変わらないわね。」
「ああ、酔わないようにしている。
　どうも、人前で酔うのは、まだ抵抗があってな。」
　マァムは少し驚いた様子で彼を見た。確か、１０人で、ワインを１２本近く空けていた。マァムは全く飲んでいないのだから、１人１本以上飲んでいた者が何人もいたことになる。
「結構飲まされていたけど、あれでも平気なの？」
「気が張っているせいかもしれんな。あの程度では問題ない。」
「すごいわね。私なんて、コップ半分でダメなのに。」
　マァムは、ヒュンケルから受け取った水を喉に流し込み、身体を内側から冷やした。人いきれの熱気のせいで水を欲していた体は、乾いた砂のように水を吸い込む。マァムはほっと息を吐いた。
　マァムは、自身の隣に座ったヒュンケルに視線を向けると、ヒュ

ンケルは、少し困ったような面をしていた。
「しかし・・・マァムの旦那、と言われるのは慣れないな。」
　ほんのりと、頬を染めているのだろうか。彼のことばにマァムも笑みを漏らした。
「でも、ちゃんとお話ししてたじゃない。
　知らない人ばっかりで大変だったでしょう？ありがとう、ヒュンケル。気を遣ってくれて。」
「いや。みんな、お前の大事な人たちなのだろう？」
「そうね。」
　酔って失礼なことを言うこともあったが、基本的には気の良い村人たちだ。
　マァムは、ヒュンケルと笑みを浮かべて語り合っていたが、そのうち、マァムは彼から視線を反らし、俯いた。手の中のカップを弄び、こころなしか、ほんのりと頬を染めているように見えた。
「それと・・・あの・・・ありがとう、ヒュンケル。」
「なにがだ？」
「わ、私のこと・・・褒めてくれて。」

それと…あの…ありがとうヒュンケル
なにがだ?
わ、私のこと…
褒めてくれて

イラスト：カヅキ様（https://www.pixiv.net/users/1688436）

　ヒュンケルは、一瞬、どのことを言われているのかわからない様子で、首を傾げた。特別なことを言った覚えがないので、よくわからないのだ。
　マァムは、言いにくそうに、言葉を足した。
「あ、愛らしい女性って・・・。」
　ようやくここで、彼は合点がいったように声を上げた。
「俺は思ったことを言ったまでだが。」
「うん・・・解ってる・・・貴方ならそう言うだろうなって・・・。だから余計に嬉しいの。」
　そうして、マァムは懐かしそうに目を細めながら、ぽつりぽつりと思い出を語っていった。
「私ね、昔から強かったし、父さんと母さんの子だからこの村を守らなきゃって思ってて、男の子みたいってずっと言われてたの。そのことを気にしてもいなかったし、私も、男の子の方が、母さんを安心させられたのかなって思ったこともたくさんあったわ。」
　ヒュンケルは、そのまま黙って、マァムの言葉に耳を傾けていた。
「だから、今日、皆に言われたことも別に気にはしていないんだけど・・・それでも、ヒュンケルが、愛らしいって言ってくれて・・・。嬉しかったの。そんな風に言われたことはなかったから。だから、ありがとうって。」
「俺からしたら、不思議で仕方がない。今までお前をそう評する者がいなかったというのがな。」
「だってしょうがないわよ。私ほんとうに男の子みたいだったし。」
　ヒュンケルは、ふっと笑みを浮かべると、熱の感じられる眼差しをマァムに注いだ。
「マァム。俺からしたら、お前ほど愛らしい女性はいない。その・・・お前の顔立ちも、可愛らしいのだが・・・それだけではな

くて、お前の立ち振る舞いも、心根も、すべてがそう思う。」
　マァムは顔を真っ赤にし、カップをテーブルに置くと、ヒュンケルの胸元に手を伸ばした。顔を見ていては、とてもではないが、口にできない言葉を紡いでいく。
「ヒュンケル・・・私も、貴方のこと・・・か、かっこいいなあって・・・。
　ああ、もう、なんであの戦いの頃は、貴方のこと普通に見られたのかしら。」
「今は違うのか？」
　マァムの髪をなでながら問いかけるヒュンケルに、マァムは顔を伏せたまま、呟いた。
「・・・だって、見惚れちゃう・・・。」
　途端に、ヒュンケルは目を丸くし、そして、くくっと笑みを漏らした。マァムは、顔を上げ、間近から彼を見上げて抗議をした。
「わ、笑わないでよ。」
　その口をとがらせた表情も愛おしいと思う。
ヒュンケルは、笑みをかみ殺しながら、ひとこと、言葉を返した。
「なら同じだな。」
「えっ。」
「俺も同じだ。」
　その言葉に、マァムは戸惑いの声を上げた。
「そ、そうなの・・・？」
　朱がさしたマァムの頬に、ヒュンケルは、そっと手を伸ばした。彼の長い指が、マァムの肌に触れる。
「ああ、そうさ。いつもお前に見惚れている。
　愛おしくて仕方がない。
　もっとも、俺はあの頃からだがな。隠すのが大変だった。」
「そ、そんなそぶり、全然、無かったのに・・・。」
「隠していたからな。だが、今は違う。いまはもう、隠してはいないが、それでも、言い足りない。」
　そして、ヒュンケルは、マァムの頤に指を伸ばし、愛おしさと、熱っぽさと、そして、わずかな剣呑さを感じさせる眼差しを、妻に注いだ。

「だから、今日は特別に、お前を可愛がらせてくれないか。」
　マァムの返事よりも早く、ヒュンケルは、妻の唇を塞いだ。吐息がこぼれる中、マァムが小さく頷いたのを、ヒュンケルは逃さなかった。